

2025年度 第7期311ゼミナール 南あわじ班

活動報告書

「防災カルタ」を通した考える防災の実践



メンバー (全11名)

鈴木和香 (3年、文責)・狩野温士 (3年、文責)

大久保奏亮 (2年)・高木那々実 (2年)・千葉雄翔 (2年)・七木田朱理 (2年)・根本蒼唯 (2年)

菅原日向葵 (1年)・近岡舞 (1年)・芳賀香苗 (1年)・福田琴子 (1年)

目次

1. プロジェクトの概要
2. 企画立案と準備について
3. 市小学校での防災カルタ実践
 4. 成果と課題
 5. 総括と展望
 6. 振り返り

1. プロジェクトの概要

ユース防災プロジェクトは、兵庫県南あわじ市と連携する高校・大学の学生を中心に多世代による防災教育の形を模索し、防災企画・運営等を行うプロジェクトである。2023年度より始まった本プロジェクトは、兵庫教育大学、鳴門教育大学、淡路三原高校、舞子高校、そして宮城教育大学を実行委員として組織され、各団体は南あわじ市総合防災訓練（2025年11月16日実施）におけるワークショップや展示作成などの防災企画において啓発・教育活動を行う。

南あわじ班は、ユース防災プロジェクトにおける防災企画の立案・準備・運営を行う特別班として、311ゼミナール有志より組織された。5月に、311ゼミナール・高野先生より企画周知及び人員の招集を頂いてから、学内外での打ち合わせの中で今年度の実践を「楽しみながら考える防災カルタ」とすることを決定した。

2. 企画立案と準備について

2. 1 企画立案と目的の整理

南あわじ班は、3年生2名を班長に、2年生5名、1年生4名の計11名に311ゼミナール・古市先生を加えて構成される。うち、昨年度プロジェクトの参加・運営経験のあるメンバー2名より昨年度の反省を共有する中で、「自分事」意識を持たせる状況設定や、すべての児童が参加できる役割設定の課題に対応できる実践を構想するためのアイデアを募った。この中で、多様な内容を盛り込むことのできる点、人的規模の大きな実践であってもすべての参加者に役割が与えられる点、児童が楽しみながら防災について学ぶことのできる点から、防災カルタを企画することとなった。こうしたカルタの特性から、基本的な災害への備えや意識を振り返るとともに、東日本大震災の震災遺構や海岸林の話題を盛り込んだ札を通して、東日本大震災の教訓を「宮教大」として発信することが可能となる。一方で、昨年度参加メンバーから共有された、南あわじ市の子どもたちの防災に対する知識水準の高さに関する印象や、児童が企画を楽しむだけでなく、企画から学びを得られるような工夫が求められるだろうという実感から、読み上げる内容に誤りの内容を紛れ込ませ、正しい内容のみをとる、誤りの内容はとらないという思考の踏ませることをルールとして設けた。また、実践の最終盤では、読み上げられた内容が一概に正しい内容とも誤りの内容とも判断できないような災害時のジレンマをテーマとした読み札を扱い、災害について考え続けることの重要性を実感できるような過程を踏ませることとした。

以上の実践アウトラインをふまえて、本企画の目的を、「楽しみながら考える防災カルタ」を通して、災害からの教訓をとらえ、自分なりに考え続ける姿勢を育む一助とすること、に設定した。

企画の概要(「3. 市小学校でのカルタ実践」で詳述)

対象	南あわじ市立市小学校 第4学年の児童
規模	1グループ5～6人×7グループ
分担	全体進行1名 全体解説 1名 アイスブレイク進行・記録 1名 各班点数記録・解説補助 7名 (当日欠席1名のため班員全員の人数と一致しない)
流れ	1. アイスブレイク 2. ルール説明 3. 実践 (1) 正しい内容の札のみ読み上げ(正誤判定なし、解説を適宜実施) (2) 誤った内容の札を混在させて読み上げ(正誤判定あり、解説を適宜実施) (3) 災害時のジレンマを盛り込んだ札を読み上げ (4) 札をとった児童、とらなかった児童がそれぞれ意見発表 (5) 全体総括 4. 表彰・賞品授与
注意点	・カルタは計44枚 うち正の内容35枚(うち写真札3枚)、誤の内容6枚、ジレンマ3枚 ・正の内容をとって+1、誤りの内容をとって-1、誤りの内容を見逃して±0、 写真札をとって+2ポイント ・各班の中で最もポイントの高い一名が表彰 ・賞品は、実践で使用した絵札1セットに読み札1セットを加えた、絵札+読み札セット 参加賞として44枚の札の内容を補足した解説資料を配布

2. 2 準備物完成まで

本実践にあたっては、対象児童数に対応して7グループ分の読み札と絵札のセット、及び予備1セット分の読み札と絵札のセットの計8セットを準備した。

実践の基本方針に沿ったカルタを作成するにあたって、第一に読み札の作成、次に絵札の作成を行い、これの作業に並行してカルタの下地作成を進めるという流れで作成した。Google スプレッドシート上で読み札のアイデアを44の頭文字に対応させて整理し、毎週水曜日のゼミの定期時間に進捗を確認、複数候補から内容を確定、絵札の役割分担を行った。絵札については、絵札作成係を分担し、作成係のメンバーが作成した絵札を、特定のメンバーのMicrosoft Word ファイル上に集約して作成した。その後、読み札についても同様にMicrosoft Word ファイル上に起こし、311ゼミナール・高野先生のご協力のもと、機構のプリンターから印刷をかけた。

カルタの下地については、工作用紙を土台に、千代紙を両面に張り付け、印刷しカットした読み札ないし絵札を片面に張り付けて作成した。

作成にあたっては、作業可能な時間が各メンバーで異なることもあり、作業できる時間に各自が作業する形をとったが、自主的な持ち帰り作業や不定期の集中作業によって、期日までに作業は完了した。

また、昨年度実践において着用した311ゼミナールのTシャツについて、南あわじ市より「宮教大のアイコンとしてわかりやすい、アピールしやすい」とのお話をうけ、今年度も作成した。作成に当たっては、Tシャツ作成係を分担し、期日までに作業は完了した。

さらに、カルタを通して学んだ内容、考えた内容についてフォローアップするため、カルタ44枚の内容についての解説資料をA4両面刷り1枚で作成した。読み札の作成段階でGoogleスプレッドシートにメモした、札のコンセプトを基に、それぞれの内容をより深めるために参考となるウェブサイトの情報や、写真札の撮影地情報などを盛り込んだ資料は、参加児童全員に対する参加賞として配布する役割も担った。作成に当たっては、アウトラインを大まかに記述後全体に共有、大まかに分担したメンバーがそれぞれ細部を修正し、311ゼミナール・佐々木先生のご協力のもと印刷をかけ、期日までに作業は完了した。

2. 3 全体打合せから

11月15・16日までには、以下の日程で全体ミーティングが開かれた。Zoom上で実行委員どうしが顔を合わせて企画内容や進捗を共有する機会であり、作業目標もこの日程に合わせて設定するなど、企画準備の上で重要な意義をもつターニングポイントとなった。

この打合せでは、他団体に対する進捗共有としてプレゼンテーションを作成・報告する時間が設けられた。このような報告を通して、班内の作業進捗を整理し振り返るとともに、他大学からのフィードバックを受けて、企画内容をよりブラッシュアップすることができた。特に、実践の核となるカルタという題材そのもののもつゲーム性と学びにつながる思考及び判断の時間との兼ね合いについては、逐次第三者目線からのアイデアも振り返りの指標とすることで、実践内でのメリハリをつけた流れの設定や解説資料の作成という形で具体的に反映させた。

08月19日	第一回全体打合せ 南あわじ市+三大学プロジェクトメンバーの顔合わせ プロジェクトの概要説明
09月01日	第二回全体打合せ 対象学年選定、企画内容検討開始
10月01日	第三回全体打合せ 対象学年決定、実践計画案共有、現状と展望共有
11月04日	第四回全体打合せ 現状の作業進捗共有、実践当日の流れ共有
12月16日	最終振り返りミーティング プロジェクト全体を通じた振り返り、次年度に向けた改善点の整理

3. 市小学校での防災カルタ実践

当日は市小学校をメインの会場として南あわじ市の総合防災訓練が行われ、地元の高校生や警察、消防や消防団の方々がブースを企画していた。防災訓練には市小学校の児童や地域の方々が年齢問わず参加しており、県や市の職員の指示に従いながら訓練に参加する姿、備蓄食料や簡易トイレなどの展示ブースに積極的に訪れたり実際に体験してみたりという姿から、一人一人の防災意識の高さを感じた。

南あわじ班は、まず総合防災訓練、各ブースや展示の視察を個人で自由に行う時間とし、訓練終了後、教室に移動し防災カルタの活動準備、実際に活動するという流れで動いた。

その中で、今年度は、災害や防災・減災をテーマにした防災カルタを企画した。概要は以下の通りである。

【企画の概要】

対象	市小学校 4 年生の児童
規模	1 グループ 5~6 人×7 グループ
活動の流れ	<p>1. アイスブレイク</p> <p>初対面ではあるが活動を充実したものにするために、グループ編成後に担当する宮教生と児童の距離を縮めることを目的にジェスチャーゲームを行った。</p> <p>2. カルタのルール説明</p> <p>カルタのルールは以下の3つである。</p> <ul style="list-style-type: none">・読み札を聞き、正しい内容であると考えたら取る。・正しい内容のものを取って+1 点、誤りの内容のものを取って-1 点（お手付きも同様に-1 点）・絵札が写真になっているものを取って+2 点 <p>この3点について、児童が活動中でも確認できるよう黒板に示した上で説明を行った。</p> <p>3. カルタの実践</p> <p>はじめは正しい内容のものを中心に進め、中盤から正しい内容のものと誤りの内容のものを織り交ぜた。正誤どちらともいえないものについては、正しいと判断して取った児童の意見、誤りだと判断して取った児童の意見を聞きながら、考えの深化を促した。内容に補足が必要なものについては適宜口頭で行った。（内容は参考1）</p> <p>4. 表彰・景品の授与</p> <p>各グループ担当の班メンバーが得点を記録し、これをふまえて各グループの1位となった児童を全体表彰した。景品として、活動で使用したカ</p>

ルタの読み札と取り札 1 セットにしたものを贈呈した。また、読み札の内容について詳しい説明をまとめた資料を全員に贈呈した（参考 2）。贈呈に際して、1 位となった児童に感想を発表してもらい、活動の締めとした。

カルタの趣旨は、正しい内容であるか、誤りの内容であるかについて児童が判断して「取る・取らない」の動作を取り入れることにより、災害や防災・減災についての知識や思考を深めることである。また、正しいとも誤りであるともいえない内容のものを準備することによって、自分だったらどうするかという点について考えさせることや、自分以外の人がどう捉えるか知り、様々な立場の人の考えを理解させる目的もあった。



1)防災訓練の様子 1



2)防災訓練の様子 2



3)アイスブレイクの様子



4)実践の様子 1



5)実践の様子 2



6)実践の様子 3



7)実践の様子 4



8)表彰・景品授与の様子



9)三大学集合写真

【参考1 実践における読み札・絵札】

	読み札	正誤判定	キーワード
あ	あの山が 静かでもまだ 火は眠る	正	活火山と休火山・火山災害
い	171 みんなをつなぐ 伝言板	正	発災後の防災・災害伝言板
う	海ぞいの 林が守る 町と人	正	海岸林・津波の緩衝
え	エリアメール 届いたときは すぐかくにん	正	エリアメール・緊急避難
お	落ち着いて まずは身の安全 たしかめる	正	地震・緊急避難
か	火事発生！ エレベーターで すぐひなん	誤	発災時の避難・避難経路の確認
き	近所とも 声をかけあい 助け合い	正	発生前の防災・コミュニティ・集団避難
く	車より 歩いて逃げてよ じゅうたいだ	正	発災時の避難・避難と渋滞
け	血液型 救助の人にも 分かるかな	正	救急・日頃の備え
こ	このマーク 自然災害伝承碑	正	災害伝承・地図記号
さ	災害時 ペットは連れて 行けないよ	ジレンマ札	避難所・ペット問題
し	震災の 記憶を遺す 小学校	正	災害の伝承・震災遺構
す	少しなら 大丈夫だと 海を見に	誤	津波発生時の避難・豪雨災害
せ	世界中の 支援を受けた 大震災	正	支援物資・国際協力
そ	それ本当？ だいふくで見抜く ウソ情報	正	発災時の備え・情報リテラシー
た	大丈夫 みんなも避難 してないし	誤	発災時の備え・正常性バイアス
ち	地図をみて 近くの避難所 知っておこう	正	日頃の備え・避難経路の確認
つ	津波くる 低く遠くに 避難しよう	誤	発災時の避難・水平避難・垂直避難
て	てんでんこ 命を守る 合言葉	正	発災時の避難・てんでんこ・継承
と	東北を 今も見守る 一本松	正	震災の継承・奇跡の一本松
な	なんどでも 確認しよう 避難場所	正	日頃の備え・避難経路の確認
に	逃げないよ うちの内陸地域だし	誤	発災時の避難・津波の遡上
ぬ	ぬくもりを 分け合う避難所 小さな輪	正	避難所とコミュニティ
ね	ねぼけてても ゆれたらまずは 頭守れ	正	緊急避難・日頃の備え
の	のがさない 小さなサイン 大きな危機	正	初期避難・情報収集と活用
は	話し合う すべての備えの 出発点	正	発災前の行動・事前防災
ひ	非常食 たまには食べて 味見して	正	防災グッズの事前確認・ローリングストック
ふ	ふり返らず 安全な場所へ まっしぐら	正	発災時の避難行動
へ	部屋のなか そうじは後で まあいいか	誤	整理整頓・落下回避・避難経路の確保
ほ	防潮堤 住民みんな 喜んだ	ジレンマ札	防潮堤と景観問題
ま	待ち合わせ 家族と決めた あの場所へ	正	事前避難・発災前の備え

【参考2 実践における配布資料】

防災かるた 解説資料 2025年11月16日 (日)

あ行

あ あらの山が 静かでもよい 火は眠る

2025年11月現在、日本には111の活火山があります。いつもは静やかに見えるあの山も、次の噴火で驚かしている状態なのです。

い いり！ みんなをつなぐ 伝言棒

大きな災害が発生した時は、被災地の通信が一時的に途切れてしまいます。その時、電話番号1171にかけることで、安否情報を一時的に録音・発信することができます。

う 海沿いの 柱が守る 助とん

写真のような海岸林は、津波の勢いを弱めたり、海から吹く強風を和らげたりと、人々の避難時間を稼ぐ、街を守る役割を果たしています。

え エリアメール 届いたよ すぐ避難

手元の携帯電話に届く、緊急地震速報や津波警報などを素早く配信するサービスをエリアメールと言います。「(エリアメール)は、緊急速報メールのうち、特に株式会社NTTドコモが提供するサービスを指します。

お 落ちついて まはりの安全 確かめる

急にやってきた災害に落ちつかない気分になったり、慌てどうしようもないかわからなくなったりしたときは、まず落ち着いて深呼吸し、身の回りの安全を確認しましょう。

か行

か 火事発生！ エレベーターで すぐ避難

火事の際、エレベーターで避難するのはとても危険です。火災による停電や機械の故障で閉じ込められる危険があるため、落ちついて階段や避難誘導員を使いましょう。

き 近所とも 声かけたい 助け合い

災害時、一番近くにいるのは家族だけではなく「近所の人」です。普段からあいさつや会話を通じておくことで、いざという時に助け合える関係が生まれます。

く くるまより あいさつは 命を守る

災害時、多くの人が車で避難しようとするため、渋滞が発生する可能性があります。逃げ遅れないためにも、徒歩での避難も視野に入れましょう。

こ 血道型 救急隊のしるし わかるかな

災害時、大けがをした意識を失ってしまったり自分で血道を傷てたことができません。救助の人がすぐに適切な治療を行うために、血道や傷の有無などを書いてカードをメモや財布に入れておくことで安心です。

こ こまごめ 自然災害伝承録

過去に発生した洪水や土砂災害、津波や火山災害

害などの自然災害の様子や被害を伝えるための石碑・モニュメントを自然災害伝承碑と呼び、それを表す地図記号です。

さ行

さ 災害時 ペットはつれて いけいけい

避難する時、大事な家族であるペットを連れていきますか？その避難所ではペットを受け入れてくれますか？同じく避難してきた人がアレルギーを持っているのでしょうか？

し 震災の 記憶を語り 小学校

大規模地震の被害の大きさや悲惨さ、教訓などを後世に伝える被災建築物などを「震災遺構」と呼びます。写真は震災遺構石巻市立門前小学校。

す すこしなら たいいふほどは 海も好き

津波や大規模な地震が起きているとき、その様子を見に行こうと海や川、田んぼに近づいたことにより悲惨な事故が発生しています。絶対にやめましょう。

せ 世界のしるし 支援を受けた 大震災

災害が頻発する日本は、昔から大きな災害のために世界中から支援をもらってきました。中でも東日本大震災では、計126の国や地域、機関から物資、寄付金を受け取っています。

そ それまで？ ぬくぬく暖かく 感謝情報

災害時、情報の錯綜の中で、正しい情報を見極めるためのキーワードが「だいいい」です。「だ」が、「い」を発信したが、「ふく」するの情報を確かめたかが合言葉です。

た行

た 大丈夫 あんなに避難 してはい

危険が過ぎても「あんなに避難してないし大丈夫」と楽観視してしまう人間の特性を認知バイアスと言います。バイアスについて知り、率先して避難しましょう。

て 地図をみて 近の避難所 知っておこう

いつ来るかわからない災害に備え、いざというときの素早い避難のため、ハザードマップや避難経路をあらかじめ確認しておきましょう。

と 津波の 低く低い 避難しな

津波はすぐい速せて街を飲み込みます。すぐに「高い」場所に避難しましょう。

て てんんん！ 命を守る 合言葉

「てんんん」は、手形指金石市をはじめとする三陸の方言です。いち早く各自「てんんん」を叫びながら、高台へ逃げようという合言葉が定められています。

と と東北を 今も見守る 一本松

防災かるた 解説資料 2025年11月16日 (日)

岩手県陸前高田市の海岸林はそのほとんどが津波に流されてしまいましたが、その中の一本だけが耐え残りました。津波に耐え、復興のシンボルとして東北を見守ってきた「奇跡の一本松」は震災遺構に登録されています。

な行

な さんでも 確認しよう 避難場所

いつも決まっている避難場所を確認しよう。避難場所が変更になっている場合は、避難場所を確認しよう。

に 逃げたいよ うちが内陸 地域だし

津波がやってくるのは沿岸地域だけではなく、たとえ内陸地域であっても川をさかのぼり、津波が襲う恐れがあります。

ぬ ぬくぬくを 分け合う避難所 小さな輪

災害時、避難所では見知らずの人同士が一時的に共同生活を営みます。お互いに協力し合い、ともに一丸となって困難を乗り越えましょう。

ぬ ぬくぬくを 分け合う避難所 小さな輪

災害時、避難所では見知らずの人同士が一時的に共同生活を営みます。お互いに協力し合い、ともに一丸となって困難を乗り越えましょう。

の のどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

の のどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

ら ラジオでも 情報聞いて 行動を

津波が町や人を守るために、多くの場所で防波堤が作られました。人々は、いつかまた来るあ

の津波に備えて、安心して暮らすために防波堤が建設されてきましたが、その中の一本だけが耐え残りました。津波に耐え、復興のシンボルとして東北を見守ってきた「奇跡の一本松」は震災遺構に登録されています。

は行

は 待ち合わせ 家族と決めた あの場所へ

急にやってくる災害。家族と一緒に被災する場合は待ち合わせ場所を確認しよう。避難所が決まらなければ、待ち合わせ場所になります。

み 目がもじ きこえなかったら どうするの？

もしあなたの耳が聞こえなかったらどうやって避難しますか？あなたの身近な人の耳が聞こえなかったらどうやって避難しますか？避難所で共同生活を営む人の耳が聞こえなかったらあなたにはどんなサポートができますか？

め めどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

も もどつくよ 夜の避難に 安心だ

急に地震が襲ったときや、災害のリスクが予想よりも高まったときには避難所でも安全な場所へ避難することがあります。夜の避難でも自立自足型であれば安全な避難がサポートします。

4. 成果と課題

成果としては、主に以下の三点が挙げられる。

第一に、今回企画したカルタのねらいに沿った実践ができたことである。カルタ本来が持つゲーム性と正誤判断に応じた得点を設定したことにより、長丁場の活動であったが、集中を切らさず楽しみながら考える児童の姿が多くみられた。また、宮教生として児童に願う姿を踏まえてカルタを準備する時間においては、各メンバーが改めて震災を思い起こし、改めて学びなおすことができたことや、震災当時の状況や今の東北の姿を知らない児童に向けて写真札を用いつつ解説できたことも成果であると捉えている。

第二に、実践中に児童らの主体的な取り組みが見られたことである。得点を取ることでできた嬉しさや友達と活動する楽しさ、判断を誤ったり競り負けたりした時の悔しさのみならず、ジレンマ的な問題について迷う姿、真剣に考え自身の考えを述べる姿、他者の考えを理解しようとする姿が見られた。

第三に、メンバー1人1人がそれぞれの強みを活かした実践ができたことである。各グループに一人ずつファシリテーターとして付いたメンバーが、児童の考えに寄り添ったり、場合に応じて問いかけたりする姿が見られ、児童らが活発に意見を交換することができていた。一人一人が責任をもって取り組んだことにより、より充実した活動ができた振り返る。

一方で、課題としては、主に以下の三点が挙げられる。

第一に、準備期間における意見の吸い上げと分担における課題である。意見の吸い上げや活動準備・当日の役割分担については、夏季休業期間中に班としての活動が始まったこともあり、オンライン上でアイデアを募り、意思決定はできるだけ対面という方針をとった。各メンバーの意見が適切に出されていたか、意見を拾いきれていたか、適切な分担ができていたかについては疑問が残る結果となってしまった。対面の時間の比重を大きくすることが重要である。

第二に、進行スケジュール設定の甘さに関する課題ある。対面の時間が不足したことを背景に、意思決定の時間が不足していたために、カルタの内容や役割分担などを形にすることが難しく、作業が後ろ倒しになってしまった。目指す姿や基本方針をこまめに確認することが必要であったと考えた。

第三に、当日の実践について考える時間の不足に関する課題である。44枚の読み札を1時間弱で扱ったことにより、冒頭に設定していた正しい内容のものについては単純なカルタになってしまったことや、44枚やり通すことを念頭に置いていたため十分に1つ1つの内容について考えさせることができなかつたこと、最後に考えさせることを計画していた「さ」の内容について充てる時間が窮屈になってしまった。このことについては、各メンバーが特に課題として意識するところであり、「楽しみながら考える」ということの難しさや事前の練り上げの重要性について改めて実感する結果となった。実際に児童らと活動

して分かる課題でもあるが、事前に宮教生のみでリハーサルを行うことも必要であったと考えた。

5. 総括と展望

当日の実践を通して、企画したカルタについては、期待していた児童の姿が見られたことや宮教生ならではのアプローチがあり、概ね満足できる結果であった。カルタの軸に添えた、正誤判断を通して、震災を知らない児童が興味を持って真剣に解説を聞いたり、自身の考えを表したりという過程を経て、「自分事として災害や防災・減災を考えさせること」が達成できた。

しかしながら、当日までの準備段階の振り返りや実践の中で表出した課題は指摘した通りにいくつかあり、来年度活動する際に念頭に置いて活動することによって更に充実した活動を行なうことが展望される。

今回の実践を通して、教員として命を大切にする子供たちを育むために必要なことについて考えることができ、また他大学・高校の実践についても企画段階から携わり結果を共有したことにより、命を守る教育についての視野を広げることができた。

6. 振り返り

鈴木和香（3年）

初めての参加にも関わらず班長という立場で活動に参加することに対して、準備段階から当日を終えるまで、自分に務まるか不安しかなかったが、終えてみると参加してよかったと感じている。防災カルタという新たな取り組みを行うことに際して、「ジレンマ的な内容を用いて自分事として捉えさせる」という素晴らしい案が出され、結果として効果的な災害や防災・減災の学びに繋がっていたことに深く感動した。それぞれの学業など多忙な時期に、それぞれがそれぞれにできることを担うという役割分担ではあったが、協力して準備ができたことには班のメンバーに感謝である。特に、自身が中々行動を起こすことができなかった部分に対して尽力してくださった狩野君には感謝と尊敬の気持ちでいっぱいである。個人的には市小学校での実践に向けた準備期間や、斎藤先生のワークショップ、他大学との交流を通して、改めて震災について思い起こすとともに防災や減災についての知識が深まったいい機会であったと感じている。また、教員を志す者として、このような教育・学習を通して、有事だけでなく日頃から命を守る・大切にする児童の育成に繋がっていくという意識を持ち、どのように震災を知らないこどもたちに「ハッピーエンドの防災教育」ができるかということについて考えを深めることの大切さを再度確認することができた。

狩野温土（3年）

日本は災害大国である。その中で、災害という不可避の現象に対して今日までに積み重ねてきた先人の思いや教訓について振り返るとともに、そうした時間を背景も学年も異なる他者と共有できたことに大きな意義を感じる。南あわじ市、兵庫教育大学、鳴門教育大学、舞子高校、三原高校という多様な立場の方々と交流する中で、それぞれがどのように災害というものに向き合っているのか、そこに共通するものにはどんな意味があるのか改めて考え直す時間となった。本プロジェクトにおいては、宮城教育大学として、また311ゼミナール第7期の活動として、南あわじ市の子どもたちに私たちは何を還元できるか、誰かとともに防災を考えるとは何を意味するかという点について強く意識しながら私自身企画立案から取り組んできた。その中で、東日本大震災と現在までの道筋に自分という人間の学びや考えを加えながら整理し、そのうえでカルタとして結実させられたことについて、自分の中でも一つの成果として評価したい。またその時には、カルタ作成段階や実践当日における各メンバーの姿勢が光ったと感じる。まずは自分の手の届くところから一生懸命に取り組む姿が印象強く、無事に当初目標を達成することができたことも大きな成果である。いいチームだった。

一方で、自身が担った班長という立場については、適当なマネジメントという点での課題を意識したプロジェクトとなった。自主ゼミナールという結合の中で、どのようにメンバーと協働していくべきか、11通りの多様なアイデアをいかに吸い上げ取りまとめるか、試行錯誤の中でのふるまいとなり結果として各自のポテンシャルに依存する本番となったことは、再現性の面では手放しで喜ぶことはできない。また、特に1・2年生メンバーの作業や取り組みについても、もう少し幅と深みを持たせられれば次年度以降に向けて発展性を持たせられたかもしれないと自身の反省するところである。もう少しうまくやれた。このことについては、次年度に最終を迎える学部における取り組みにおいて留意する糧とするとともに、近い将来学校現場においてプロジェクトを推進する場面で意識する課題として持ち越す。

大久保奏亮（2年）

今回の実践を通して強く感じたのは、防災教育とは「正解を教える営み」ではなく、「迷いながら考える・経験を積み重ねる営み」であるということである。防災カルタや対話を中心とした活動で、子どもたちには瞬時に答えを出すことよりも、「なぜそう思ったのか」「他の選択肢はなかったのか」を言葉にしようとするのを期待していた。活動から、防災において本当に重要なのは、判断に至るまでの思考のプロセスであることを実感してほしかった。

また、活動を進める中で印象的だったのは、災害を「遠い出来事」としてではなく、「自分の生活と地続きの問題」として捉え直すことができた点である。日常的な場面を想定した問いかけによって、子どもたちは防災を特別な訓練ではなく、普段の行動選択の延

長線上にあるものとして受け止めることができたのではないだろうか。これは、地域性や実生活との接続を意識した教材設計の成果であり、今後の防災教育においても重要な視点だと考える。

一方で、活動を成立させることに注力するあまり、一つひとつの発言を深め切れなかった場面があったことは課題として残った。防災教育では「早く進めること」よりも、「立ち止まって考えること」に価値がある。今後は、あらかじめ想定される反応だけでなく、想定外の意見が出たときにどう受け止め、どう学びにつなげるかという教員側の構えも重要になると感じた。

今回の経験は、防災教育を通して子どもたちの命を守る力を育てると同時に、自分自身が教育者としてどのように判断し、向き合うのかを問い直す機会となった。この学びを、将来の実践の中で確かな形にしていきたい。

高木那々実（2年）

私は今回の防災カルタの活動を通して、改めて子どもに向けた防災教育について考えることができた。日本は地震、津波、台風などさまざまな災害が起こる国であり、自分の命を自分で守れるようになるために防災教育は重要になってくる。しかし、住んでいる地域や個人の経験によって防災への意識には差が生まれてしまう。さらに、これから防災教育を受ける子どもたちは東日本大震災のような大きな災害を経験していない世代であるため、防災を自分ごととして考えてもらうにはどのような工夫が必要なのかを考えさせられた。今回、防災カルタを実践して、はじめはカルタが苦手と乗り気ではなかった子どもたちも、カルタを取れなかった場合でも、どうしてその札は取ってよかったのか、取ってはいけなかったのかを活発に話し合っていた。その様子を見ることができたことから、防災を自分のこととして考えられるようになっていないのではないかと感じた。カルタ自体への好き嫌いはあるにしても、子ども一人一人がよく考え、自分の意見を発言し、相手に伝えようとする姿を見ることができた。この経験を通して防災教育の堅い、難しい、暗いというイメージは、方法次第で変えることができるのだと実感した。また、防災カルタ実践、斎藤先生のワークショップ、南あわじ市の総合防災訓練の見学を通して、将来、出身地である沿岸部で教員として働きたいと考えている自分にとって非常に大きな学びとなった。さらに、教員を志す他大学の学生と交流する機会はほとんどないため、このような貴重な機会をいただけたことにとても感謝している。今回の活動で得た学びや反省を、今後の活動や大学での学びに活かし、防災教育に強い教員を目指していきたい。

千葉雄翔（2年）

イベント当日に参加したかったです、、、

七木田朱理（2年）

今回の防災かるたの活動を通して、遊びを取り入れた学習の面白さと難しさを感じた。防災学習は災害が多い日本ではより重要なテーマであり、子どもたちが小さい頃から考える機会を持つことが大切だと思う。一方、防災について子どもたちに教える際には、恐怖心を植え付けることなく、自分事として考えてもらうという難しさを感じていた。かるた形式にすることで、札に書いてある内容を見ることになり、興味を持ち、楽しみながら取り組むことができていたと感じた。

その点で、今回行った防災かるたは、子どもたちが自然と札の内容に目を向け、防災について考えるきっかけを作ることができたと感じている。遊びの中で行うことで、構えすぎることなく、楽しみながら取り組む様子が見られた。札を取ったあとに内容を読み返したり、「これ知ってる」と話したりする姿から、防災を身近なものとして受け止めてくれているように感じた。特に印象的であったのは、最初「かるたをするよ」と伝えた時に、「かるた苦手なんだよね」と話していた子についてである。活動が進むにつれて、楽しそうに取り組んでいて、終わるころには、「やってよかったー！楽しかった」と話してくれた。その言葉を聞いたとき、準備できてよかったと感じた。今回の活動を通して、防災について楽しく学べる場を作ることの大切さを実感した。今後も、子どもたちが前向きに参加できるような工夫を大切にしながら、防災について考える機会を作っていきたい。

根本蒼唯（2年）

昨年度よりも多くの人数をプロジェクトにかけることができたので、より充実した内容になった。しかし、多い故の連携不足や他人任せになってしまった部分が個人的にはあったので、他のメンバーに感謝したい。

菅原日向葵（1年）

教員を志す者として、本プロジェクトを通して班員と共に防災教育について考え、自分たちで取り組むことのできる防災の在り方を児童に伝える活動ができたことは、非常に貴重な経験であったと思う。防災を知識として教えるのではなく、児童に防災を自分事として考える機会を提供することの重要性を、今回の実践を通して、強く実感することができた。

防災カルタの作成では、児童にとって分かりやすく、楽しみながら防災について考えられる内容となるよう工夫を重ねた。しかし、実際に防災カルタの活動を実施した結果、全体への指示が一部の児童に十分に届かない場面があった。また、ゲーム性が強くなりすぎたことで、カルタが得意な児童が有利になり、ほかの児童が不満を感じたり、勝ち負けに意識が向いてしまい、防災について考えるという本来の目的が薄れてしまったりする場面もあった。そのため、今後は児童全員が積極的に参加できるよう、進行方法や声掛けの仕方を工夫し、防災教育としての意義を損なわないよう実施したいと考える。今回の反省点を踏まえた修正を行い、防災カルタを他の機会でも実施出来れば良いと考える。

今回のプロジェクトを通して、班員それぞれが持つ多様な視点やアイデアの重要性を改めて実感した。自分一人では思いつかない発想や視点が班員から多く示され、それによって企画や実践内容の幅が広がっただけでなく、児童への関わり方や防災教育活動についても新たな気づきを得ることができた。この経験を通じて、他者の意見を柔軟に取り入れ、協働してより良い成果を生み出す姿勢の大切さを学んだ。今回学んだことを生かし、実際に教員となった際には、教育現場にも防災カルタの活動を積極的に取り入れたいと考える。

近岡舞（1年）

自分たちが他の土地に学びに行くだけでなく、防災教育の場を設けていただいたことで、インプットにとどまらないアウトプットの機会を得ることができた点は、今回の活動の大きな意義であったと感じている。学んだ内容を自分の中で整理し、相手に伝える過程を経ることで、その学びが改めて自分自身に戻ってきて、より深い理解や新たな気づきにつながった。単に知識として蓄積するのではなく、実践を通して再構築された学びであった点に、これまでの活動とは異なる価値があった。

これまでも、自分たちが現場に赴き、そこで得た知識を報告書にまとめるという活動は何度も経験してきた。しかし、今回のように実際にアウトプットの場が用意され、かつ対象が小学生であったことにより、どのように伝えれば理解してもらえるのか、防災をどの視点から捉えるべきかを改めて考え直す必要があった。その過程で、防災は専門的な知識の伝達だけではなく、日常生活とどのようにつながっているのかを意識させることが重要であると実感した。この視点の転換は、自分自身の防災観を見直すきっかけにもなった。さらに、子どもたちとの関わりだけでなく、同世代の人たちとの交流を通して、多様な考え方や価値観に触れることができたことも、非常に貴重な経験であった。住んでいる土地やこれまでの経験の違いによって、防災に対する意識や捉え方が大きく異なることを実感し、その一つ一つが新たな発見の連続であった。こうした経験を一過性のものにせず、今後の学びや活動に必ず生かしていきたい。そして今回得た気づきや反省を次の活動へとつなげ、より実践的で意味のある防災教育に関わっていきたいと感じた。

芳賀香苗（1年）

実際に生徒と触れ合い、自分自身も防災を学びながら参加することができた。このプロジェクトが始動してから、私自身準備期間中に活動に参加出来ないことが多く、班長を初めとするメンバーの方々にはとても迷惑をかけてしまい、申し訳なく思う。かるた制作では短期間ではあるが、自分の役目を明確にして、自分のやるべき事が全うできたと思う。当日は南あわじの文化や気候、雰囲気を感じながら楽しく活動することができた。今回の活動を通して、自分自身の防災の知識を増やすことができたのはもちろん、防災の認識や取り組みの差異を感じることもできた。南あわじの避難所設営は宮城県とは異なり仕切りやシャワートイレなど、様々な違いがあり、新鮮で面白かったと同時に、こういった最先

端の取り組みをもっと広く世間に広めるべきだと強く思った。南あわじ市の防災から学んだことも沢山ある。お互いの地域がお互いの良さを知り、実践しあうなどお互いの良さを補える関係にしていくべきだと感じる良い経験であった。

福田琴子（1年）

今回の活動を通して、改めて学校現場での防災教育についてより深く学んでいきたいと思いました。今回のカルタのように自分たちで何かを作って実際に小学生に向けてやってみるという活動はなかなかできないことだと思うので、とてもいい経験になりました。そして、カルタを行った際の子どもたちのキラキラした姿を見て行ってよかったなと思いました。やはり、地域が変わると防災への意識も変わってくるということを身をもって感じたので、今後の活動にも生かしていきたいと思いました。自分が普段住んでいる地域以外の地域全体での防災訓練を実際に見学することもでき、たくさんの学びがありました。また、教員という同じ職を目指す他大学の方々や自分が普段なかなか出会うことのできない地域の方々と交流する中で、新しい気づきをたくさん得ることができました。南あわじに行くということは自分にとってかなり大きな挑戦だったけれど、たくさんの方との関わりやワークショップを通して自分の防災意識もより高まり、311ゼミでたくさんを経験させていただけるこの環境に改めて感謝したいなと思いました。今回の活動を通して、教員を目指す者として、そして東日本大地震を経験した者として何ができるのか改めて考えていきたいと思うようになりました。これからの大学生活にも今回の経験を生かしながら防災について学んでいきたいです。

以上